14

光子　あれほど大切におすつてゐた繪とい
ふ繪は人の手にわたつてしまつて、今ではもう一枚も残つてはゐ
ませぬ。あれを御覧、床の間を。鉄雄がい
たづらに書いたあんな物を掛けて慰めて
ゐるくらゐなのだもの。

藤川　どうぞ旦那を揺り起して手
紙をもう一本書かしてください。さあ旦那を……

六左ヱ門　（飛び下りて来て藤川の胸倉を掴み
ひきずるやうにして）これ、藤川さん、あんたは何といふ
人間だ。お前さん二人はこれほど旦那さ
まの御恩を着てゐながら、お前は人ぢや
ない。

藤川　六さん、まあ放つといてくれ。旦那さまは
まるで御家来のお嬢様を見たゞけ見え
この十年といふもの、たゞのあの恐ろしい脚の痛
みのためにどれほど御苦労をなすつたの知れない。
一度おかみさんのお前の妹の手術をなすつた翌日か
ら恐ろしい毒とやらがはいつてまる二ヶ月も御
入院なすつたぢやないの。それだけも旦那は

さま

改造お印